
加害者の言い分

junk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

加害者の言い分

【Nコード】

N9436F

【作者名】

junk

【あらすじ】

忘れられがちな「もう一つの視点」を書いていければなあと思います。

プロローグ：私の信念（前書き）

この物語はフィクションです。実際の事件等には一切関係ありませんので、「事実と違う」「や」「こんなのあるわけない」などの指摘はご遠慮ください。

プロローグ：私の信念

私は弁護士、前田俊介という。

私には周りの弁護士仲間から、「敗戦処理者」と呼ばれている。

なぜなら、私は「加害者」側の、特に糾弾される加害者の側の弁護に立つことが多いからだ。

私には1つの信念がある。

「犯罪には原因があり、その全てが加害者に帰着されるわけではない。」

だから、私はほかの弁護士が嫌がるようなクライアントの依頼も断らずに受けた。

たとえ、裁判で勝てなくとも、話を聞いてやることで、加害者の更正にもきつとつながるはずだと考えるからだ。

これは、加害者救済にあたる弁護士と、そのクライアントの戦いの物語である。

DVの場合1

「前田先生……。私はね、こんなことしたくて結婚したんじゃないんですよ……。」

私の前で、その若い男性はただ、涙を流していた。

男性の名前は加藤雅俊、35歳既婚、今回訪れた理由は離婚の相談。ここまででは予約の段階で分かっていたことであつた。

「今回は離婚の相談ということですが、経緯を教えてくださいませんか？」

私が問いかけると、加藤さんは俯きながら答えた。

「その……。DVでして……。」
ドメスティック・バイオレンス

DV。家庭内暴力を意味するこの言葉は、離婚理由として珍しい物ではなかつた。

「そうですね……。加害者は、あなたということですか？」

そう私が問いかけると、加藤さんは小さくはい、といい、すぐに続けた。

「あの、私今まで弁護士事務所何軒か回ったんですけど全部駄目だったんです。何も聞かないですぐ慰謝料の話になっちゃって……。このことはネットで知りました。ここならもしかしたら一緒に闘ってもらえるんじゃないかって……。お願いします。離婚もある程度の慰謝料も我慢するんで……。親権だけは……。」

「お子さんが、いらつしやるんですか。」

「ええ……。5歳になる息子が……。」

「一般論としては、DVでの親権は難しいんですね。でも、裁判では何が起るのか分かりません。奥さんの方にも責任があるということもありますし、頑張りましょう!!」

私がそう言つと、加藤さんは肩を震わせ、泣いた。

「私はこんな子供の取り合いなんて、したくなかった．．．。前田先生．．．。私はね、こんなことしたくて結婚したんじゃないんですよ．．．。」

「加藤さん、DVに至る経緯を教えてくださいいただけますか？」

私がそう言つと、加藤さんはぽつぽつと、語り出した。

DVの場合1（後書き）

余り勉強してないんで、間違いがあると思いますが、苦笑いで許してください。・・・どうもすみません。

DVの場合2

私は、妻と7年前に結婚しました。

もう昔のことになりますが、大恋愛でして、

言っちゃなんですがこの人なら一生暮らしても良いと思っていました。

息子も生まれ、結婚生活全てがうまくいっていたのです。

ところが、2年ほど前、ちょうど私の仕事が忙しくなってきた頃から、

妻の私に対する接し方が変わり始めたのです。

私はそのころ、新しいプロジェクトのメンバーに選ばれ、多忙な毎日を送っていました。

平日休日関係なく働き、休みは月に1日あるかないか。終電近くの電車で帰宅することも1度や2度ではありませんでした。

そんな私に、妻がかけた言葉は慰労の言葉でも励ましの言葉でもありませんでした。

「もっと早く帰ってこれないの！？待ってるこっちの身にもなつてよ。」

「家族のことはどうでも良いの！？どうせ次の休みもごろごろしてるんですよ？」

「今日も優斗（息子の名前です）、あなたの顔一度も見えてないのよ！？あなたそれでも父親！？」

・・・拳げ句の果てに、こんなことまで言われました。

「こんな生活なら結婚しなきゃ良かった・・・。」

1年前です。私が妻に初めて手を出したのは。

ひとしきり殴った後、私は我に返り、自分のしたことに気づき、必死で謝りました。

私はまだ、彼女を愛していたからです。

そして私は、彼女の苦労も理解していたつもりなのです。

しかし、そんなことが2度、3度とあるうちに、彼女は私のことなどどうでも良いのだということに気づきました。

彼女がほかの男というらしいという噂も耳にしました。

その間にも私への非難は続いていました。

ある時には食料がないまま先に寝られたこともありました。

ある時にはチェーンロックをかけられたまま寝られたこともありました。

そうすると、私の中で何かが崩れました。今まで耐えられたことも、耐えられなくなったのです。

私は何か言われると、すぐに妻に当たるようになっていきました。

アザができるまで殴ったこともありました。

私にとって妻はもう人間ではなかったのです。

私をおとしめようとするモンスターだったのです。

ある日、妻は息子連れて妻の実家に帰りました。

その後すぐに裁判所に訴えられました。

おそらく妻の話を聞いたご両親が裁判をするよう勧めたのでしょう。

プロジェクトも終わり、今は一段落ついて、休みも普通に取れるようになっていました。

一番つらいのは、息子に会わせてもらえないことです。

もう3ヶ月会っていないでしょうか・・・。

それでも別れる前は精一杯の愛情で育ててきたつもりです。体力のあるときは公園にも連れて行ってやりました。

会社に無理言つて遊園地にも連れて行つてやりました。
今はただ、息子に会いたい、それだけです。

世間的には、私が一方的に悪い、というのが常識でしょう。

それでも、全てが私の責任ではないのではないのでしょうか？

少なくともあのとき妻が、「ご苦労様」の一言も言ってくれていたなら、どんなに救われていたことか。

・・・だからお願いします。怪我の治療費も、慰謝料も、ちゃんと払います。

息子の親権だけは欲しいのです。

D V の場合 2 (後書き)

大げさに書いているので、実際にはこんな事は起こらないかもしれません。というか、起こっていないことを祈ります・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9436f/>

加害者の言い分

2010年10月28日05時56分発行